第1420回（3月23日）

青果物流通・消費の日米比較

（ワシントン州立大学）

レイモンド・ジュソーム

この報告は1988年にワシントン州シアトル市および神戸市の消費者を対象にメール調査を行なった青果物の消費実態調査結果をとり纏めたものである。アンケート回収率はシアトル382件，神戸412件である。

調査結果を単純集計して両市間の消費者態度，消費者行動の比較を行ない，明らかとなった主な点を挙げれば以下のようである。

① 食料品の購入は，1週間あたり，シアトル2〜3回が47%，4〜5回が17%に対して，神戸では毎日54%，2〜3回が20%と神戸の購入頻度が高い。

② スーパーマーケットでの食料品の購入（金額）割合は，シアトルでは75〜100%とする家計が55%，50〜74%が22%に対し，神戸では購入割合が0〜24%，25〜49%，50〜74%の家計がいずれも20〜30%程度であり，シアトルにおけるスーパーの利用割合が高い。

③ 食事（朝食，昼食，夕食）別の青果物消費を比較すれば，朝食，昼食についてシアトルで果物の消費が多いのに対し，神戸では野菜の消費が多いという際だった差があった。米国では夕食を除き日中の食事に野菜をとる習慣は一般的ではない。一方，果物は日本ではスナックとして消費されることが多いようだ。

④「無農薬食品に対して今後どの程度支出を増やしたいか」では，いずれも「若干」とする割合がシアトルで64%，神戸で68%と大きな差はないが，「50%以上」がシアトル10%，神戸17%，「これ以上増やさない」がシアトル21%，神戸8%であり，やや神戸の方が支出増加の意向が強い。

ついで両市の調査結果について，それぞれ家族周期（4階層），学歴および所得額による社会的地位（3階層）を設け，これと国（2階層）を加え独立変数として，次の4つの質問項目を従属変数とするカイ自乗検定を行なった。消費態度，消費行動の差が家族周期，社会階層，国のいずれによってどの程度説明されるかの検討である。

A.「高くても質のよい食品を買った方がよい」

B.「添加物のない加工食品を買った方がよい」

C.「昼食でりんごを食べる」

D.「昼食でキャベツを食べる」

いずれも，国によって説明される値が，最大でありB, Dについて社会的地位は有意な値を示さない。したがって，今後両国の消費態度および消費行動パターンが接近していくという傾向を否定することはできないが，少なくとも当面，それらの決定要因として文化（国）がなおもって極めて重要であると指摘することができる。

この報告は青果物をめぐって2国間のライフスタイルの一面に焦点を当てたにとどまったが，今後一層，多国間によるライフスタイル比較研究が望まれる。

（文責・香月敏孝）